

# 一つの伝記論 (8)

安 達 肆 郎

## 目 次

序

一

二

三 利用された伝記

四 好事家の伝記

五 文学的伝記

六 歴史的伝記

七

八 自己目的・自足的伝記 (1)

九 自己目的・自足的伝記 (2)

十

十一

十二

十三

十四

十五 } .....

十六 } .....本号

## 十五

「伝記」の筆者、読者のこころの姿勢に「似而非なる」ものは、「肖像画」を描く画家、それを観照する人々のこころの姿勢であろう。

次に、第十二章、第十四章で述べた「本来の伝記」の筆者、読者のこころの姿勢の特徴を鮮明にするために、これを、「肖像画」を描く画家、「肖像画」の観照者のこころの姿勢と対比してみよう。

### 1

「伝記」は、特定の個人を主人公として彼の生涯を記す。その点、「伝記」は「肖像画」に似ているといえるかも知れない。

ボードレールは、「よき肖像は、私には、いつもドラマ化された伝記 (une biographie dramatisée) の様に思われる。」という (児島喜久雄、『ショパンの肖像』、岩波、5頁)。

ボードレールのこの言葉の意味は、恐らく、次の様なことであろう——。

「よき肖像」においては、肖像の主の生涯が、凝縮され、生気を与えられて、恰も一つのドラマをみる様に眺められる——。

「ドラマ」といえば、「伝記」の筆者と主人公との出逢いは、一つのドラマである。「本来の伝記」の筆者は、その「出逢い経験」を中心として主人公の生涯を凝縮し、それに生命を与えて書くのだから (第十二章参照)、「本来の伝記」は、ボードレールのいう「よき肖像」と同様「ドラマ化された伝記 (生涯)」といえるかもしれぬ。

この際の「本来の伝記」の筆者の態度は、形式的には (「生涯」をドラマ化してかく点で)、ボードレールのいう「よき肖像 (un bon portrait)」の作者の態度と似ているといえよう。

然し実質的には、両者の間には大きな相違があるのではないか——。

特定の個人の生涯をドラマ化し、それを凝縮し、それに生命を与えて、その主人公の肖像を生み出したのは、画家のみる眼である。肖像画の主人公は、ドラマ化された生涯の焦点として、その中へ画家のみる眼が、いわば見込んだ人である。「本来の伝記」の主人公の様に、生涯の生き方、生きざまの奥に、筆者がいつもその全人を以て共感しているひとはない (第十二章参照)。画家のいう「ドラマ」は彼が見たドラマである。伝記者のいう「ドラマ」は、彼の全人をまきこんだドラマである。

(その点、先述<第十四章 4 節>した奥村土牛氏の「スケッチ」の場合でも同じことで、氏の自然や人物に対する感銘は、画家のみる眼の故に、その性格において、その深さにおいて制約されるに違いない。)

レンブラントが数多く描いた自画像は、それらが描かれた頃の彼の境涯と、そこへ至る生涯を凝縮して表出していて、ボードレールがいう「よき肖像画」の実例の様に思えるが、例えば、最晩年の自画像 (「画架の前の年老いた自画

像」1660年)においてさえ、人々は、レンブラントの悲痛な、しかし、みる眼を感じないであろうか——。(レオナルドの晩年の自画像<トリノ王立図書館>や、若い頃の自画像<フィレンツェ、ウフィツィ美術館「三王礼拝」>でも同じことが感じられる。)

1879年、「死の床のカミーユ」を描いたクロード・モネは、後年、愛する妻を喪った時にとった自分の行動(この絵を描いたこと)を、「驚きと、ある種のうしろめたさを以て回想していた」という(「オルセ美術館」N.H.K.)。

モネは、愛するカミーユの顔色が紫に変わってゆく様をみていたのである。「うしろめたさ」は、最愛の者の死をみていたことをとがめる内からの声であろうか——。そして「驚き」は、その様なことができる自分の冷酷さに対する驚き(絶望)であろう。

この様な作者の「みる眼」に象徴される、「肖像画」の作者の主人公に対するこころの姿勢は、先述した「本来の伝記」の筆者の主人公に対するこころの姿勢とは全く異なる。

先述(第十二章)の様に、「本来の伝記」は、主人公に全人をあげて傾倒し、主人公そのひとを自己存在のうちに担うという、筆者の主人公との「出逢い経験」から生れたのである。「肖像画」の様に、主人公から一步身を退いて、主人公をみる眼から生れたのではない。<sup>(1)</sup>

従ってまた、「伝記」を書くのは、筆者にとって、主人公の生涯の生き方を迎って、主人公との出逢いを確認することである。「伝記」を書く作業は、いわば、主人公そのひととの再逢の行である(第十二章参照)。「肖像画」を描く画家の場合の様に、作品を創る作業ではない。

(その点、例えば、フラ・アンジェリコが描く「受胎告知」の様な宗教画や、信仰者が描くキリストや聖者の肖像画やアイコン<Ikona>と一般の肖像画とは異質であろう。

信仰者が「受胎告知」やキリスト、聖母、聖者の像を描くのは、「作品」を創るためでなくて、伝記者が傾倒する主人公の「伝記」を書くのと同じ類の作業であり、信仰するキリストや聖母、聖者と再逢するための行である。)

「肖像画」の観照者のこころの姿勢と第十四章で考察した「本来の伝記」の読者がとる筈のこころの姿勢とは、もっとはっきり異なる。

肖像画の観照者のこころの姿勢は、例えば次の様な論争の中に、はっきりみてとれる。

リップスによると、「肖像画が本人に似ているか否かは問題ではない。」<sup>(2)</sup>肖像画の観照者が観照するのは、一定の姓名をもった人物ではない。「作品（肖像画）の価値を決するものは、作中に現われている人間性が含むところの美的価値である。」<sup>(3)</sup>

これに対して児島喜久雄氏は、次の様に反論する。

「実際において、肖像画が表現するところは、一定の姓名を有する『此人物』なのである」。<sup>(4)</sup>「肖像画」が本人（主人公）に似ていなくてもよい、と考えるのは、「肖像画における再認識を、単純な比較判断とみる為に生じた誤謬である」。<sup>(5)</sup>

「肖像画」が本人に似ていることを認める観照者の再認識は、単純な比較判断ではなくて、個性に対する芸術的観照なのである。「肖像画におけるこの再認識は、決して単純な理知的の比較判断ではない。吾々は其処に其人物の個性を観照することなしに、これを再認識することはない。肖像画においては、美的観照と再認識とは別個の作用ではないのである」。<sup>(6)</sup>

結局、「肖像画」は画かれた主人公に似ていなければならない。観照者はその「似ている」ことを観照するとき、真によく主人公の個性を観照（美的観照）しているのである。

右の論争で注意すべきは、リップスも児島氏も、「肖像画」の観照者が、それをただ「作品」として、その美的価値に従ってみていることを認めていることである。（論争は、その「美的価値」の内に、「主人公に似ている」ことが含まれるか否かであった。）

ここに述べた「肖像画」の観照者のこころの姿勢は第十四章にあげた、所謂「作品」に対する観照（theōria）の姿勢である。「肖像画」は、作者から、あ

る場合には描かれた主人公からも切り離されて（主人公に似ていなくてもよい、という場合）、単なる作品として、ただその美的価値に従って観照される（みられる）にすぎない（第十四章3節参照）。

この様なこころの姿勢は、先に（第十四章）詳述した様に、「本来の伝記」の読者がとってはならぬ姿勢（「思わく」）の最たるものである。読者にとって「本来の伝記」は、単なる作品、即ち観照の対象ではなくて、主人公に対する共感の場、筆者に対する同感の場である。読者は、みる眼を以てでなく全人を以てこれに接せねばならぬ（第十四章参照）。

畢竟、「伝記（「本来の伝記」）」と「肖像画」とは、形式的にはともかくも、実質的には、殊に、筆者（画家）、読者（観照者）のこころの姿勢に関しては全く異なる。

従ってまた、「本来の伝記」と「肖像画」とは、それが人々（筆者、画家、読者、観照者）に対してもつ意味（意義）においても全く異なる（第十六章16、17節参照）。（みる人に対してもつ意義においても信仰者が描く「宗教画」「キリストや聖者の肖像画」やイコンは、普通の「肖像画」とは異なる。信仰者が描いたキリストや聖者の肖像画は、これを仰ぐ人々にとっては、観照の対象ではなくて、それを描いた人の感銘に同感し、ひいて、画かれた主人公＜キリスト、聖母、聖者＞への信仰へ至る縁を含んだ場となるに違いない＜第十四章10節参照＞。）

## 2

「本来の伝記」が読者にとって、「主人公そのひとへの共感の場」であり、その「共感の場である」ということが、前章（第十四章）で示した様に、「主人公と出逢う（共感する）縁を含んだ場である」ことを意味するとすると、「本来の伝記」は、人々（読者）にとって、彼等の在り方、生き方と深いかかわりをもち、それだけに彼等のこころを刺す、いわば「刺」を藏した存在である（第十四章1節、5節参照）。

この様なものとして、「本来の伝記」を読むことは、人々（読者）にとって、

心安からざるわざであるに違いない。

然も、右の「刺」は、「本来の伝記」の核心（筆者と主人公との出逢い）との関わりから生ずるのであるから、読者にとっての「本来の伝記」の右の様な性格（意義）は、偶然のものではない（第十六章16、17節参照）。

とまれ、この様な存在として、「本来の伝記」は、人間社会において重い存在理由をもつ筈である。

実際に、われわれが先に「本来の伝記」の実例としてあげたロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』や、クセノポンの『アゲシラオス』伝が、当時の社会で重い存在理由をもっていたことは、先に両者を分析した際にみた通りである。

ところが、今日、世に行われている多数の伝記（「各種の伝記」）は、前述した「刺」を全く含まないためか、気楽に書き流され、読み流されていて、「伝記」独自の積極的な存在理由を失った様にみえる。

この様な状況をみると、現行の伝記は、「伝記」という名をもつが「本来の伝記」とは全く別もので、両者は何のかかわりも持たぬ存在であるかの様に思われてくる。

然し、果して、本当にそうなのか——。現行の伝記は、「本来の伝記」と「伝記」としての血のつながりを全く持たないのであろうか——。現行の伝記は、「刺」を喪い切ったのであろうか——。（二つの問いは、実は、同じ問いである。というのは、ここにいう「刺」は、前章で考察した様に、「本来の伝記」の核心部分が生み出したものであるから、「刺」を喪い切っているか否かと問うことは、即ち、現行の伝記が「本来の伝記」の核心となおつながりを持つか＜血のつながりをもつか＞否かを問うことに他ならぬからである。）

さて、右の問いに関連して今日のところある人々は、何ごとかを感得（経験）している様である。そのことを示す二つの新聞記事をあげてみよう。

1987年3月29日付「朝日新聞」の日曜版は、磯貝辰典氏の次の様な新刊紹介を載せている。

「歴史小説は、最近手がこんできて、読者の信用をえているが、創作抜きの伝記は、依然として不人気である。」「然し近頃、旧来の伝記のからを破る物語風に描いた西洋人物史が多数現われている」「物語りとしての歴史書の出版は世界的な現象なのである。」

わが国でも例えば、「シャルマーニュの戴冠」(ロベール・フォルト著、大島誠訳)、「断頭台の女王」(大野重雄著)、「チエーザレボルジアあるいは優雅なる冷酷」(塩野七生)、「ルネサンスの女達」(塩野七生)、「イザベッラ・デステ」(マッシモ・フェリサッティ、千種堅訳)、「ボンパドゥール夫人」(D. d. カストル、小宮正弘訳)等。

ここにあげられたもの、例えば「イザベッラ・デステ」を読んでみると、磯貝氏のいう「物語風に描いた西洋人物史」は、年代記でもなく小説でもなく、その中間をゆく様な叙述で、内容は、読者の好奇心を満足させることを狙った底のものである。何よりも、その叙述には、読者に「同感」を迫る底の、筆者の深い感銘(主人公に対する感銘)がこめられていない。それだけ、読者はそれを気楽に読み流せるというものである。

磯貝氏も触れているが、これより先、1930~1940年頃以来、アメリカでは、所謂「伝記小説」が流行している様である。「伝記小説」の流行は、「伝記」との関係でいえば、「物語り風人物史」の流行と同類の現象と思われる。

とまれ、例えば、1934、5年以来、アメリカでベストセラーになった、アーヴィング・ストーンの「炎の人ゴッホ」(Lust for Life, The novel of Vincent van Gogh by Irving Stone) (1939) はその好例である。

「作者前がき」によると、この書は、筆者がパリのローゼンバーク画廊で、ゴッホの展覧会をみて感動したのがきっかけとなって書かれたというのが、内容は、フランス、ドイツで公刊されていたゴッホの紹介記事をまとめて「物語りとして仕上げた」ものである。その中には、純然たるフィクションや、想像による会話や挿話が多く含まれていて、読者の興味に訴えた物語である。ゴッホに対する筆者の最初の感銘がこめられた、それによって貫かれた伝記ではな

い。その点で「伝記小説」は、この書と限らず何れも「伝記」に「似而非なる」存在である。また、かく「伝記」に「似而非なる」存在である点で、「伝記小説」は前述した「物語り風人物史」と同類である<sup>(7)</sup>。

この様な「物語り風人物史」や「伝記小説」の類が、広く世に流行しているということは、今日の人々が、現行の伝記（所謂「各種の伝記」を含む）の無味乾燥で堅苦しい叙述に反撥し、さればといって、自分の生活（生き方）と深いかわりをもつ底の、もっと重い伝記には無関心で、それが現われることを望んでも期待してもいないことを示すものであろう。むしろ、人々は、逆に、現行の伝記からさえ脱して、もっと軽いものを求めているのである。「物語り風人物史」や「伝記小説」が気楽に読み流せる底のものであることを思うと、そう考えざるを得ない。

このことは、これを逆にいうと、今日の人々が、現行の伝記からさえ、なお気楽に読み流せぬ底の堅苦しい何かを感じていること、即ち現行の伝記が一種の「刺」をもつことを暗に認めているということである。現行の伝記も、読者にとって、なお、「刺」を喪い切っていないのである。

1978年某月某日の朝日新聞の読書欄に、「海外のベストセラー」として、ヒルデスハイマーの「モーツァルト」(Wolfgang Hildesheimer: Mozart, Suhrkamp.) が紹介されている。

筆者ヒルデスハイマーは、この伝記を「モーツァルトの反伝記」と呼んでいる。理由は、この伝記が、従来のモーツァルト伝とは違った、むしろ、それとは反対の狙い、反対の仕方では書かれたものだからである。

従来のモーツァルト伝は、ヒルデスハイマーによると、次の様なものであった。

a. 人と作品といった古風な記述法、b. 小説的潤色による作品解説、c. 「モーツァルト学」と呼ばれる煩雑な事実の集積。

では、ヒルデスハイマー自身は、この「反伝記」で何を狙い、何を希っている



るのか——。また、どのような仕方ですべてを書いているのか——。この書の紹介者によると（私はまだこの書を読んでいないので、紹介者に頼る他はない）。

a. この書で取扱われているのは、「モーツァルトの生涯と音楽」である。b. その為の資料として筆者が「何よりも大切にしているのはモーツァルトの音楽と、彼と父とが交換した手紙である」（筆者は、「このすばらしい遺産さえあればほかに何が必要だろう」という）。c. この書で筆者が狙っているのは、「この不抜の音楽家の神髄」「モーツァルトの魅力」に迫り、それを浮び上らせることである（筆者は、このベストセラーとは別に、「モーツァルトは誰だったのか」というエッセーを書いている様である）。

ヒルデスハイマーのこの様な『反伝記』の狙いと仕方とは、主人公の外面の動きを示す資料に基づいて、ただ主人公の行跡や事績を正確に、また、時にはそれを潤色して述べるだけの現行の年代記風の伝記に対して、主人公のこころの動きを示す資料（父子が交換した手紙と作品）に基づいて、主人公そのひとの生涯に亘る生き方を辿り、そこに自ら浮び上る筈の主人公そのひとに迫ろうとする点で、然も、それを他の目的や狙いの為でなく、自己目的にする点で、「本来の伝記」の仕方と狙いに似ている、少なくとも、その方向を旨としている、といってよい（第十二章参照）。

『反伝記』は、また、それが筆者、読者に対してもつであろう意義においても、「本来の伝記」に似ている。

『反伝記』の様な伝記を書くことは、筆者にとって、主人公を外からみているのでなく、主人公そのひとに直接し、彼の生き方を辿ることである。しかも、それによって主人公の「神髄」に迫ろうとする筆者は、それに自分自身の全人を賭けざるをえない。

それ故、「反伝記」を書くことは、筆者自身の実存的な在り方、生き方と深いかわりを持ち、「反伝記」そのものは筆者自身（ひと）にとって重い意義をもつ筈。

筆者自身の全人をあげての主人公そのひととの直接、そこに生じた感銘は、

自ら「反伝記」にこめられる。それ故、「反伝記」は、読者にとっても気楽に読み流すことのできぬものとなる筈 (第十四章参照)。

さて、この様な「伝記」が、「反伝記」として (所謂「伝記」の姿への反撥として、即ち、「伝記」が本来とるべき姿として)、書かれ、それがベストセラーになっていることは、今日の多くのところある人々が、現行の伝記が一種の「刺」をもつことを暗に認めつつ、それにあきたらず、より強い「刺」を蔵する伝記をもとめており、また、より強い「刺」を蔵するのが、「伝記」の本来の姿だと思っていることを示唆している。

以上、近頃の伝記関係のベストセラーを二種紹介したが、これによってみると、今日の「伝記」の読者は、それを「堅苦しい」と感じるにせよ、「もの足りぬ」と感じるにせよ、とにかく現行の伝記が、なお一種の「刺」を蔵することを実感しているのである。

今日の人々 (読者) によってこの様に「実感された刺」は、この節の冒頭に述べた問題を始め、われわれが探究した、また、これから探究する問題に関連して、いろいろ重要な意味をもつ。

a. それは先ず、現行の様々の伝記が、一見「本来の伝記」と何のかかわりも持たぬかの様にみえるが、実は、依然「伝記」として、「本来の伝記」と深い血のつながりをもっていることの何よりの証である。

現行の伝記は、単なる「文学の一ジャンル」「歴史の一分枝」等々に成り果ててはいないのである。

b. 気の抜けた所謂「伝記」に反撥する「反伝記」の流行は、第十四章に述べたこと (「本来の伝記」が読者に対して重要な意義をもつこと) の間接証明になる。

c. この様なものとして、今日の人々に「実感された刺」は、また「文化としての伝記」の「素性」、「正体 (構成、内容、性格)」を解明する際の有力な手掛りとなるに違いない (第十六章参照)。

十六

先に、小論の目的は、「伝記」に関する私の従来の探究の結果をふまえて、「伝記に関する三つの基本的問い」に答えることだといったが（「序」参照）、「三つの基本的問い」の中、われわれは先に、「伝記は本来、人間精神からいかにして（どの様なところから、どの様にして）生れるか」という問いに答え（第十二章）、また、前々章（第十四章）では、「伝記は本来、直接それに関係する人間（主人公、筆者、読者）にとって何を意味するか」という問いに答えた。それで、次のわれわれの課題は、右の二つの問いへの答をふまえて、残るもう一つの問い、「畢竟、人間にとって『伝記』は本来何なのか——」に答えることである。

（第二の問いが、「伝記」に直接かかわる個々の人間と「本来の伝記」との、いわば個々のかかわりを問うているのに対して、第三の問いは、右の「個々のかかわり」をふまえて、総じて人間と「伝記」とのかかわりを問うているのである。

また、第一、第二の問いが問うているのは、「本来の伝記」とその筆者、読者とのかかわりであったが、第三の問いが問うているのは、「本来の伝記」「各種の伝記」等、種々の伝記でなくて、総じて＜全体としての＞「伝記」と人間とのかかわりである。）

1

われわれは既に、「本来の伝記」や「各種の伝記」が、どの様に（どの様なところから、どの様にして）創られるかをみてきた。その結果に鑑みて、ここで一応（詳細は後述）、「伝記」は、総じて、人間（精神）によって創られた文化（kultur）の一種であるといつてよいであろう。

然し、では、「伝記」は——他の文化に対して——如何なる文化なのか——、換言すれば、総じて「伝記」（文化として、全体としての伝記）は、他の文化に対して、人間のいかなるところから、いか様にして創られたのか（伝記の「素性」）、また、どの様な姿で人間世界に実存しているのか（「伝記」の正体＜構成、内容、性格＞）。第三の問いは、結局それ（「文化として、全体としての

「伝記」の独得の「素性」と「正体」を問うているのである。

然し、今日のわれわれは、この「問い」に即答することができない。

というのは、後述の様に、今日の人々は、総じて「伝記」（「文化としての伝記」）の実態を十分には把握しておらず、ひいて、「文化としての伝記」の「素性」や「正体」を忘れ果てているから（後述参照）、右の「問い」に答えるために、われわれは先ず、「文化としての伝記」の実態を掘り起し（思いおこし）、それに基づいて、改めて「文化としての伝記」の素性、正体を探究（発掘、復原）せねばならぬからである。

次へ進む前に、今日の伝記研究者は、「文化としての伝記」の「素性」、「正体」を解明するために、何故、上述の様な手順をとらざるをえないのか、その事情を、やや立ち入って省みておこう。

a. 今日広く世に行われているのは、その殆どが所謂「各種の伝記」である。そこで人々は、「伝記」は即ち「各種の伝記」であり、それが「伝記」のすべてであると思い込み、それとは種的に異なった「伝記」が他に存在するなどとは思ひもかけぬ。

ところが、小論第三章以来の探究によって、実際には、「各種の伝記」とは種的に異なった「本来の伝記（自己目的・自足的伝記）」が存在することが確認されている。

してみると、「各種の伝記」は、「文化としての伝記」の一部（一種——後述）にすぎぬ。それに、小論（三章～七章）における探究によれば、「各種の伝記」は、性格的にも偏っていて、本来の伝記とはいえぬ。結局、右の諸点をみただけでも、今日の人々が、「文化としての伝記」の実態を、十分には把握していないことは明らかである。比喩的にいえば、「文化としての伝記」の実態は、今日の人々の眼が届かぬ地下に埋もれてしまっているのである。

b. それに、「文化としての伝記」の実態が、人々の眼の届かぬ地下に埋れて久しい。そこで、人々は「文化としての伝記」の生れ（「素性」）も、ありし日の姿（「正体」）も忘れ果ててしまっている。（人々の中には、そのことを自覚せず、所謂「各種の伝記」を「伝記」のすべてと思い込み、その様な誤った

「実態」把握に基づいて、「文化としての伝記」の「素性」や「正体」を軽率に云々する<例えば、「伝記は文学の一ジャンルである」「伝記は歴史の一分枝である」等々>人があるが、「正確な実態把握」に基づかぬこのような見解が誤りであることはいうまでもない。

(上述<a、b>した状況は、喩えていえば、次の様なことであろうか——。

曾て広大な境内に、壮麗な七堂伽藍を具えていた大寺院が、戦乱の中で、わずかに周辺の建物の一部を残して殆ど地下に埋もれてしまった。そこで今の人々は、その大寺院の実態<例えば、大寺院がどのような境内に、どのように構築されていたか、また、いかなる宗教的・経済的基盤に支えられていたか、どのような人々によってどのようにして運営されていたか等々>を知らず、然も埋もれて久しいために、人々は、その大寺院の創建のいきさつ、創建した人々の希い、大寺院の構成、また、元の壮麗な姿や大寺院が当時の人々に対してもっていた生々しい意義等々を忘れてしまっている。)

さて、このような状況の下で、われわれは、「第三の問い」に答えるためにいかにすべきか——。

先ず、「各種の伝記」が「文化としての伝記」のすべてであるという様な、今日の人々の「思いこみ」を排して、「文化としての伝記」の実態を正確に把握するために、従来、放置されていた「伝記」の跡を発掘せねばならぬ。

この「発掘」の過程において、また結果として、「文化としての伝記」の実態を示す、もしくは示唆する——「伝記」に関する——、いわば遺跡、遺物、事蹟(諸事実)が発見されるに違いない。

次に、右の「遺跡」「遺物」「諸事実」を手掛りとして(ということは即ち、発掘された「文化としての伝記」の実態に基づいて)改めて——従来の誤った諸見解に対して——「文化としての伝記」の素性と正体(構成、内容、性格)を探究せねばならぬ(この「探究」は、先の喩えでいえば、それ自体が一つの発掘であり、ある場合には復原であることはいうまでもない—後述)。

## 2

さて、右の様な観点から顧みると、小論第三章以来第十五章に至るわれわれの探究は、とりも直さず、今日の人々の眼に見えぬ地下に埋もれた「文化とし

ての伝記」の跡を発掘して、「文化としての伝記」の実態を見出すための試みに他ならぬ(後述18節参照)。

その「探究」の結果として、またその過程でわれわれは、「文化としての伝記」の「素性」「正体」に関連して、それを解明する際の手掛りとなると思われる多くの遺跡、遺物、諸事実を発見し、確認している。

次に、その中の主なものを摘記してみよう。

a. 今日、実際に世に行われている多くの伝記は、これを幾通りかに分類することができるが、それらは、その成り立ちからいうと、みな同類で、「伝記を書くこと」それ自体を目的として書かれたものではなくて、それ以外の各種の思わく(目的、好み、狙い等)を原動力として成り立ったものであることが確認された(第三～第六章)。これが、所謂「各種の伝記」である。

b. また、右述した「各種の伝記」とは成り立ちの全く(種的に)異なった、「自己目的・自足的伝記」の実例が存在することが確認された(第八～第十章)。その成り立ちの性格からみて、これこそ「本来の伝記」である(第十一章及び後述参照)。

(してみると、「各種の伝記」は、今日の多くの人々が考えている様に「文化としての伝記」のすべてではなく一部<一種>にすぎず、また、その成り立ちからみて、「本来の伝記」ではない。)

c. 各種の「思い出」、「モニュメンタルな年代記」「頌徳文に類した伝記」の類は、従来、「伝記」として認知されていないが、その成り立ちからいうと、これらは、「本来の伝記」とも「各種の伝記」とも異なった原動力による、いわば、両者の中間的性格の伝記とみなしうることが確認された(第四章の註9、第六章の註12等、第十六章10、11節参照)。

d. その他、「文化としての伝記」の「素性」、「正体」の解明に、直接手掛りとなりうると思われる、種々の「事実」が確認されているが、これらの「事実」については、「素性」、「正体」の探究の実際の手続きの際に詳述する(6節参照)。

(今日の「伝記」の筆者、読者の殆どは、「文化としての伝記」の実態、「伝

記」本来の姿などには無関心で、安易に所謂「伝記」を書き流し、読み流しているが、中には、この様な世の風潮にあき足らず、「文化としての伝記」の実態、「伝記」本来の姿に関心をよせている人々もある。

この様な人々の、「伝記者」に対する忠告、「伝記」に関する彼等の経験や批判を記した文書、特定の「伝記」に附した批評等には、「文化としての伝記」の素性、正体の探究に際して注意すべき事実や見解が示されている。＜例えば、「好事家的伝記」の筆者が、伝中ひそかに主人公そのひとと対決している場合があるという事実の指摘。また例えば、「各種の伝記」でさえも、他の文化と違って、筆者、読者の在り方、生き方に直接かかわる独得の意義＜所謂「刺」＞をもつことを間接に証しする事実の指摘——第十五章参照。＞

然し、これらの「事実」、「見解」についても、「素性」「正体」探究の実際の手続きの際に＜6節、16、17節＞詳述する。）

以上、「文化としての伝記」の実態を示唆する、「文化としての伝記」の遺物、遺跡、事実の中、特に、「伝記」の「素性」、「正体」とかかわりがあると思われる主なものをあげた。以下、この章では、それらを手掛りとして「文化としての伝記」の素性と正体を探究（発掘、復原）する。

### 3

先ず、「文化としての伝記」の素性を探究しよう。

さて、今日では、「文化としての伝記」の素性に関して、一般に「伝記は文学の一ジャンルである」とか「伝記は歴史の一分枝である」とかいわれている（後述第十七章参照）。

もし、これらの主張が、世上にみられる一部の伝記（所謂「各種の伝記」）について、それらが「一面では文学の領域に属する」等々というのではなくて、「伝記」というものはすべて、また、根っから（全体的に）文学の領域に属する等々というのであれば、（論者はそのつもりらしいが——）、これは、およそ「伝記」というものは、文学、歴史等の文化領域に属するもので、それ自体が独立した文化の一種なのではないと主張していることになる。

論者の主張を敷衍すると、文学の領域にも歴史の領域にも属さない、総じて

他の文化の領域に属さない、即ち、他種の文化の立場から独立した伝記独自の立場で書かれた伝記（「本来の伝記」）は存在しないということになる。果して、「本来の伝記」は、本当に存在しないのであろうか——。

小論第三章から第九章に至る探究は、要するに右の問いに答えるための探究であった（後述参照）。その結果、「本来の伝記」の実例として見出されたのが所謂「自己目的・自足的伝記」の実例である（第九章参照）。

所謂「自己目的・自足的伝記」の実例は、「本来の伝記」の実例である。「本来の伝記」は存在するのである。次にそのことを裏付ける「自己目的・自足的伝記」の特徴をあげてみよう。

a. 「自己目的・自足的伝記」の筆者は、先に実例を分析して確かめた様に（第七章、2・3節、第九章参照）、「伝記」を書く際に、各種の思わく（各種の文化に属する種々の「目的」、「好み」「狙い」等）から離脱し独立して、ただ「伝記」を書くことだけを目的とし、ただそのことだけを希い、ただそのことだけを狙っている。いわば、純粋な伝記者になっている。だから、彼の立場は、「伝記を書くこと」以外の「目的」「好み」「狙い」等々と結合した「各種の伝記」の筆者の立場とは異なった）伝記者独得の立場である。

b. それ故、「立場」の成り立ちからいうと、「自己目的・自足的伝記」の筆者の「立場」は、「伝記」の筆者が、他種の「目的」「好み」「狙い」等にとらわれ、それと結合し、それに従属する以前の、もともと（固有）の「伝記の立場」である。そういう意味で伝記者「本来の立場」である。（ギリシアの昔、「伝記」が「弔辞」「頌徳文」また、喜劇、悲劇等の「文学作品」「歴史叙述」等から独立して始めて世に現われた際の「伝記」の筆者の立場は、基本的にはこれと同類のものであったに違いない。＜第十一章参照、前出「古典古代における伝承と伝記」3頁、14—16頁、136—137頁等参照、なお、九章の註12参照＞。）

c. それに、「自己目的・自足的伝記」の筆者の立場（伝記者本来の立場）は、その内容からいうと、「主人公に対する全人をあげての傾倒（人間に対する人間的信仰）の立場」であるが（第八章、第十二章参照）、この様な筆者の



立場が、人間の一面（例えば、美的判断力）を以てする他種の文化の作者の立場に従属し、その領域に所属するとは考えられない（第十七章参照）。

それ故、「自己目的・自足的伝記」の筆者の立場は、ただに「各種の伝記」の筆者の立場と異なるばかりでなく、一般に、伝記を書くこと以外の目的や希いや狙いをもった他種の文化の立場とも種的に異なった、且つ、それらに俟つことなく、それらから種的に独立した別個の立場と考えられる。

畢竟、「自己目的・自足的伝記」の実例は、他種の文化の立場から独立した、伝記者独得の立場で書かれた伝記、そういう意味で「本来の伝記」の実例である。「本来の伝記」は存在するのである。

さて、この様に、伝記者本来（固有）の独立した（他種の文化の立場と異なり、且つそれに俟つことのない）独得の立場が存し、且つ、その独得の立場で書かれた「自己目的・自足的伝記」の実例が存在するということは、「伝記」が、本来は、人間精神の、——他種の文化を創る場合とは異なった——独立した独得の立場でのほたらきの所産であることを意味する。

結局、「文化としての伝記」は、本来は、他の文化とは素性（生れ）が異なった（それを創る精神の立場が異なった）独得の文化である。

#### 4

然し、「本来の伝記（自己目的・自足的伝記）」の実例は稀である。

小論第三章以来の探究で明らかになった様に、今日、実際に世に行われているのは、文学的狙いや歴史学的狙いや好事家的好みで書かれた伝記、かと思えば、道德の模範とするとか、教育の手段にするとか、時には町の誇りにするという様な目的の手段として書かれた伝記（所謂「利用された伝記」）（ここでは、これらを一括して「各種の伝記」と呼ぶ）である。

ところが、これらの「各種の伝記」は、その成り立ちからいうと、「本来の伝記」の様に、「伝記を書くこと」そのことを目的とし、そのことを狙って書かれたのではなく、それとは種的に異なった他種の文化領域に属する「目的」や「狙い」によって書かれたものである（前述参照）。その限りでは、それらは、他種の文化の立場で書かれたものである。それ故、その素性は、「本来の伝記」

の素性とは種的に異なるといわねばならぬ。

では、この様な「各種の伝記」を、なお、「独得の文化としての伝記」の一種といえるのであろうか――。

その点を考えるために、次に、「各種の伝記」と、総じて人間とのかかわりの実情を省みよう。

a. 先ず注意すべきは、実際に世に行われているのは「各種の伝記」ばかりという前述の様な「伝記」の実情は、今日の世界だけのことでなく、「各種の伝記」は、わずかに残る実例に鑑みても、人間の歴史において昔から永く広く「伝記」として生きつづけてきていることである。

このことは、「伝記」が、永い人間の歴史の中で、種々の、他種の文化の領域の中へ入り込み、それと結合しながら、しかも、その他種の文化に成り切らず（他種の文化の中へ分解吸収されることなく）、名だけでもせよ、歴史の中で、依然一面では「伝記」として生きつづけていることを意味する。

b. 然も、それはただ「伝記」という名が生きつづけているのではない。

「各種の伝記」は、「本来の伝記」とは素性が異なるに拘らず、やはり「伝記」として「本来の伝記」に類する性格をもち、人々（読者）に対して、依然他種の文化がもたぬ「伝記」独得の意義をもっている、即ち人々の生き方と直接に深いかかわりをもっている（所謂「刺」を含む）場合が多い。（後述及び第十五章2節参照。）

結局、「各種の伝記」は、ただ名ばかりでなく、それが、人間に対してもつ意義からみても、永く「伝記」として生きつづけてきたのである（12節参照）。

c. そこで、今日でも、ところある人々は、「各種の伝記」を、所謂「伝記小説」や「物語り風人物史」と区別して重視し、「各種の伝記」が人間社会で独得の存在理由をもつことを認めようとしている（第十五章2節参照）。

この様な実情をみると、「各種の伝記」は「独得の文化としての伝記」の一種であるといわざるをえない。「本来の伝記」だけを「独得の文化としての伝記」とし、「各種の伝記」を「文化としての伝記」から除外することはできない（この章の冒頭、われわれは、右の様な考察の結果を先取りして、「伝記」は総じて＜全体として＞いかなる素性をもつかを問うた）。

さて、この様に「各種の伝記」が「文化としての伝記」の一種だとすると、当面の課題である「文化としての伝記」の素性を解明するには、「本来の伝記」だけでなく、「各種の伝記」を含めた全体としての「文化としての伝記」の素性を省みなければならぬ。

然し正にそのために、われわれは一つのアポリア (aporia—難問) に直面することになる。次に、それをみよう。

5

前節の冒頭でも指摘したが、遡っていえば、そもそも、先に、小論第三章～第六章で「各種の伝記」を分類し分析した際、所謂「各種の伝記」の筆者の主たる立場は、伝記を書く際の筆者の「目的」「狙い」が所属する各種の文化の立場であることを指摘した (例えば、所謂「文学的伝記」の筆者の立場は、文学者のそれ、「歴史的伝記」の筆者の立場は、歴史家のそれである)。

してみると、文化としての「各種の伝記」の素性 (生れ) は、筆者の現在の立場の性格に従って単純に考えると、各種の文化の領域に属するという他はない。

さて、「各種の伝記」のこの様な素性は、筆者の現在の立場の来歴を無視すると (後述参照)、先述した「本来の伝記」の素性とは全く異なる。「本来の伝記」は、先述の様に、各種の文化の立場から独立した、精神の、伝記者独得の立場でのたたらきの所産であるからである (2 節参照)。

この様に、「各種の伝記」の素性が「本来の伝記」の素性と異なるのは奇妙なことである。両者は、文化としては、上述の様に同じ一つの文化 (「伝記」) であるから、これでは、「伝記」という一つの文化の素性が二通りあることになるからである。(内容的に言えば、右の奇妙さは、「文化としての伝記」の一種である「各種の伝記」の筆者の立場が、それにも拘らず、他の種の文化の領域に属するということである。) よりの確に言えば、右の様な状況は、一つの同じ、「文化としての伝記」の素性に関して一種の「くいちがい」が存することになるからである。

右述の様な「文化としての伝記」の素性に関する「くいちがい」を如何に解すべきか——。

a. 先ず、右の「くいちがい」とみえた事態自体は、小論第三章～第六章（「各種の伝記」の立場の分析）、第八章～第十一章（「自己目的・自足的伝記」の立場の分析）において、「伝記」の実例や、「伝記」に関する事実を分析して確認したことであるから、思い違いや幻影ではない。

b. 然し、右の「事態」は果して本当に「くいちがい」なのか——。

論者の中には、「本来の伝記（自己目的・自足的伝記）」の実例が極めて稀であるのに乗じて、その存在を無視して（「本来の伝記」の実例を「伝記」の「例外」とし）、現に主として世に行われている「各種の伝記」のみに注目し、それを重視して、その中のあれこれの素性をとり上げて、それを勝手に「伝記」一般の素性であるかの様に主張する人々がある（例えば「伝記は文学の一ジャンルである」「伝記は歴史の一分枝である」という。＜第十七章参照＞）。

これによって、前述した「くいちがい」は、かたちの上では一応解消することになる。

この様な主張は然し、そもそも「本来の伝記」の存在を無視している点で認め難いし、また仮にそれを認めても、この主張は、一方、「各種の伝記」自体の内に、その様な主張に反する要素が含まれていること（後述）、他方、論者の間に「伝記」が、どの文化領域に属するかに関して対立があることによって否定される。

c. では、「本来の伝記（自己目的・自足的伝記）」と「各種の伝記」とは、「伝記」という名を共有するだけで、文化としては別ものだと解すべきか——。つまり「本来の伝記」と「各種の伝記」という素性を全く異にした異なった文化が存在するのであろうか——。そう考えれば、前述の「くいちがい」は解消する。

然し、この様な「考え」は、事実によって否定される。

「各種の伝記」には、「本来の伝記」との根本における深い血のつながりを思わせる性格がみられる（第十五章の2節、及び後述参照）。両者は、素性の全く異なった（根本的に関係のない）文化とは思われぬ。

以上、「くいちがい」を解消するための種々の試みを省みたが、「試み」は何れも無駄で、結局、「文化としての伝記」の素性の前述の様な「くいちがい」は、これを事実として率直に認めざるをえない。これは、「文化としての伝記」の「素性」を考える上での一つのアポリアである。

6

「文化としての伝記」の素性に関して右の様な「くいちがい」が存在するということは、「伝記」の素性が単純なものではないことを示唆している。それは、その様な「くいちがい」を含むもの、よりの確に言えば、「くいちがい」が生起する過程を含む底のものであるに違いない。

では、「くいちがい」を含む、「文化としての伝記」の素性の真相はどの様なものであろうか――。

まず、「真相」解明の手掛りをうるために、先に留保していた「文化としての伝記」の実態を示す「諸事実」の中、「本来の伝記」の素性と、「各種の伝記」の素性に関連する「諸事実」、殊に、右述した二種の素性の間に関係があることを示唆している「諸事実」を、小論第三章から第十一章において試みた、「各種の伝記」と「自己目的・自足的伝記」の実例の分析の経過及び結果その他を省みて、そこから取り出してみよう。

1. 先に、「本来の伝記（自己目的・自足的伝記）」の実例として、ロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』をあげ、それを分析した際、この伝記には、書かれた年代が異なる二つの「序」が付けられていること、「序」に記された筆者の希い（この伝記を書いたロランの希い）は、二つの「序」で相違しており、且つ、そこには一種の「くいちがい」がみられることを指摘した（第八章2節）。

小論では、この「相違」「くいちがい」の原因を、筆者ロランを取りまく当時の社会情勢やロラン自身の様々の経験にも立ち入って探ってみたが、結局、次の様という他はなかった。

『ベートーヴェンの生涯』を書いたロランの希いは、元は彼のベートーヴェ

ン体験から直接生れ出たものであるが(第八章5節参照)、その後、ロランの心へ様々の「思わく」が侵入し、そのため、ロランの元の希いが変貌する、それが、ロランの「希い」の「相違」「くいちがい」の原因である、と。

(尤も、二つの「序」は、何れも、『ベートーヴェンの生涯』が書かれた後に、殊に「第二序文」は、それから25年の後に書かれたものであるから、右の「相違」「くいちがい」の原因となった、ロランの心への様々の「思わく」の侵入や、その為のロランの心情の変貌<「希い」の変貌>は、『ベートーヴェンの生涯』を執筆していた時点でのロランの心情のことではないことが注意されねばならない。

先にも触れた「本来の伝記<自己目的・自足的伝記>」のもう一つの実例であるクセノポンの『アゲシラオス』伝の場合も、筆者クセノポンの心には、主人公に対する傾倒の思いの他に、様々の「思わく」が侵入していたであろうことが、西洋古典の専門家によって指摘されている。(前出拙稿「伝記者のころ」326頁参照。)

2. 小論第三章～第六章での分析によって明らかになった様に、「各種の伝記(「利用された伝記」「好事家の伝記」「文学的伝記」「歴史的伝記)」の筆者の場合、こころの中心にあり、こころを支配しているのは、各種の文化領域に属する筆者の「目的」「好み」「狙い」である。そこで、この場合、主人公に対する筆者の関心は、その「目的」「好み」「狙い」等を介しての、即ち間接の関心であって、「本来の伝記」の筆者の場合の様な直接の関心(「傾倒」)ではない。

例えば、修道者の教育のために書かれた『フランシス伝』では、筆者の聖フランシスに対する関心は、「教育」の視点からの間接の関心に限られる。一般に「各種の伝記」では、主人公そのひとに対する筆者の直接の関心はみられない筈。

ところが、実際には、「各種の伝記」の筆者にも、「本来の伝記」の筆者の関心と同類の、主人公そのひとに対する直接の関心がみられる場合がある。

例えば、第四章で分析した「好事家の伝記」の一つ、石川淳『諸国畸人伝』

の場合、筆者の立場は基本的には好事家のそれ（主人公の風変りな在り方、生き方に対する「好き」「好み」）であるが、それが筆者のところを独占し、支配し切っている訳ではなくて、筆者は、時に、主人公のあくの強い人間に着目し、それを「えこじ」「気合」などと名づけ、それを買うとか買わないとかいって評価している。これは、筆者が主人公達の「あくの強い人間」に対して、「物好き」からでなく、直接に人間としてそれに同感し、或はそれに親近感をもったことを示すものである。

この様なことは、筆者の基本的立場を考えると起きる筈がないのだが、それにも拘らず、この様なことが起ったのは、恐らく、筆者の心中に、彼の基本的立場に従属し切らない、主人公に対する直接の関心が潜んでいて、それが、筆者自身も意識しないままに、基本的立場の隙間から現われ出でたのであろう（第四章「好事家的伝記」2節及び同註7参照）。

3. 「文学的伝記」の実例として小論（第五章）で分析したステファン・ツヴァイクの『マリー・アントワネット』においても、筆者は直接、主人公そのひとに対して、殆ど傾倒にちかい心情をもっている。

伝中、筆者は、無情な「運命」に弄ばれるマリー・アントワネットの苦悩と、最後に臨んでの彼女の孤独に深い同情を寄せ、また、それらを通じて成長してゆく彼女の人間の「偉大」に深く感銘している。それは、単なる文学的関心を超えた、それを介さない人間ツヴァイク（作者ツヴァイクではない）の人間マリー・アントワネットに対する直接の同感であり感銘である。

筆者がこの様に人間として、人間マリー・アントワネットに直接強い関心を抱いていたことは、この伝記の内容からばかりでなく、また、彼がこの伝記に、『一平凡人の面影』という副題をつけたことから、更には、ツヴァイクが、マリー・アントワネットを神に祭りあげたり理想化したりすることに反対して、この伝記では、人間マリー・アントワネットの魂の真実を、誇張、潤色を加えることなく示すことを強調していることから察せられる（第五章参照）。

（尤も、この『マリー・アントワネット』では、一人の人間として、主人公の人間に直接するその様なツヴァイクの態度、心情は、彼の文学的立場、文学

的関心の隙間から時に洩れ出るにすぎない。また、ここでは、筆者は時に現われ出たその様な態度、心情を、生のまゝもち続けることができない。主人公の伝記を文学作品として書くという希いのために、彼は作者として主人公から身をひいて、彼女を見てしまうからである。この伝記ばかりでなく一般に、作品として書かれた伝記が、読者に主人公そのひとを同感させずにはおかぬ底の迫力に欠けるのも、そのためである<第十四章 3 節、第十五章 1 節参照>。

〔「文学的伝記」と同様に「伝記」を作品として書く「歴史的伝記」では、筆者の「狙い」がはっきり意識されるためか、「文学的伝記」の場合の様に、主人公そのひとに対する筆者の直接の関心が、何かのかたちをとって表に現われることは少ない<第六章、第十二章参照>。

また、始めから何かの「目的」の手段として利用するために書かれた伝記<「利用された伝記」>では、筆者の立場はもっと判然としていて、伝記を書く「目的」が常に筆者の心を支配し、独占しているから、「目的」に従属し切らない底の関心<主人公に対する直接の関心>が何かのかたちで表に現われ出ることは先ずない<第三章参照>。

4. 前々章(第十四章)でみた様に、「本来の伝記」は、読者にとって、主人公そのひとを共感(傾倒)するに至る縁を含んだ場、そういう意味で、「主人公そのひとへの共感の場」である。この様なものとして、それは、人々(読者)の生活(生き方)と深いかかわりをもつ筈(第十四章参照)。それ故、「本来の伝記」は、こころある人々(読者)にとっては、気楽に読み流せる底のものではなくて、いわば、深く心を刺す「刺」を蔵する存在である(第十四章 1 節、10 節、第十五章 2 節参照)。

「本来の伝記」がこの様に、読者に対して「刺」をもつのは、もと、その原動力となったのが主人公そのひとに対する筆者の直接の、全人をあげての共感(傾倒——人間的信仰)であり、且つ、「本来の伝記」の場合は、筆者のその「傾倒」が他の思わくに妨げられることなく、生のまま「伝記」の内に現われているからである(第十二章、第十四章 2 節参照)。



これに対して、「各種の伝記」の場合、筆者の立場は、基本的には、各種の思  
わく（「目的」「好み」「狙い」）であるから、主人公に対する直接の関心が表に  
現われることは稀である。また、前述の様に、時に「直接の関心」が表に現わ  
れることがあっても、それは、「本来の伝記」の場合の様な主人公そのひとに対  
する全人をあげての純粋な傾倒（人間的信仰）である筈がない。筆者は一方に  
原動力となった目的や狙いをもっているから、それは、いわば片手間の関心、  
例えば、主人公の人間への親近感や尊敬に止まる（前述参照）。また、ここで  
は、現われ出た「直接の関心」は、筆者の思わくに妨げられて、その生気を失  
う（前述参照）。

それ故、「各種の伝記」は、何れにしても、読者に対してこころを刺す底の  
「刺」をもつには到らない筈なのである。

ところが、実際には、「各種の伝記」の読者も、やはりそこに一種の「刺」  
を感得している場合が多い。現に世に行われている「各種の伝記」は、「本来  
の伝記」が読者に対してもっていた「刺」を失い切っていないのである。

例えば、ある歴史家によると、「創作抜き」の伝記（「歴史的伝記」）が依然と  
して不人気で、人々はそれに替って、気楽に読み流せる底の「伝記のからを  
破り物語風に描いた西洋人物史」を求め、それが世界的に流行しているという  
（第十五章 2 節）。このことは、所謂「歴史的伝記」がなお一種の「刺」を蔵  
することの間接証明になろう。

また、この頃、「伝記」に替って、「伝記小説」が流行しているのも、所謂  
「文学的伝記」が「刺」をもつことの一つの「間接証明」になる（第十五章 2  
節）。

また、「各種の伝記」も「刺をもっている筈だ」、或は、「もっている可きだ」  
とする人々（筆者、読者）もあることを証しするものとして、ヒルデスハイマ  
ーの『モーツァルト』（1978）が「反伝記」の名の下に、（所謂「伝記」の姿へ  
の反撥として）ヨーロッパでベストセラーになっているという事実をあげるこ  
とができる（第十五章 2 節）。

——未完——

註

十五

- (1) 「眼」は、単にみる眼ではない。レオナルドやゲーテは、「眼の人 (Augen-mensch)」といわれるが、彼等は眼で思惟し、直観した (下村寅太郎、『レオナルド——遠景と近景——』、南窓社、126頁)。

然し、「眼」は何よりも先ず「みる眼」であろう。だから、二人の「眼の人」はまた「みるために生れた (zum Sehen geboren)」とも呼ばれている (同上、124頁)。

ところで「みる」ことは、見られたのが「自然」であれ「人間」であれ、それから一步身を退いて、それに対することである。「みる眼」が象徴するのは、先ずみる人のその様なこころの姿勢である。「無限に動くものを、ことごとく映しながら、自らはみだされることのない鏡は、外的には凡ゆる多様な活動をしながら、目標もなく、友もなく妻もなく、局外者の如くであったレオナルドの心を象徴している (パノフスキー)」(同上、125頁)。

- (2) 児島喜久雄、「ショパンの肖像」、岩波、6頁。  
(3) 同上。  
(4) 同上。  
(5) 同上。  
(6) 同上、5～6頁。  
(7) 「伝記小説」と「物語り風人物史」は、ともに、いわば「刺」を抜かれた「伝記」である。なお、I. Stone は、この他にも多数の伝記小説を書き、それが何れもベストセラーになっているという。例えば、「正義の弁護士」(1941)、「不滅の妻」(1944)、「永遠の愛 (リンカーン夫人の生涯)」(1954)、「ミケランジェロの生涯」(1960) 等。